40

コッホのまな弟子、リディア・ラビノウィッチ・ケンプナー教授

泉　彪之助

演者は先に、ベルリン市立モアビット病院がナチス支配下で受けた迫害について報告したが、その際、ユダヤ人医師で最後に追放されたのが、細菌・血清学研究室を二七年間（一四年間の誤り）にわたって主宰してきたリディア・ラビノウィッチ・ケンプナー教授であるとした。このケンプナー教授がコッホ研究所に在籍したことがあり、コッホのアフリカ旅行にも同行した著名な学者であることを知ったので、教授について報告し、コッホ研究所の活動の一端に触れるとともに、細菌学・免疫学初期のユダヤ系医学者の功績についてものべたい。

名前のケンプナーは夫君の姓であり、ラビノウィッチは父称かと思われるが、あるいは実家の姓かも知れない。リディアは、一八七一年八月二二日、リトワニアのコヴノで生まれた。スイスのチューリッヒとベルンで自然科学を学び、一八九四年Ph.D.の学位取得、ベルリンの感染症研究所で卒後研修を受けた。一八九六年フィラデルフィア女子医科大学の細菌学の助教授に任命され、細菌学研究室を創設した。一八九八年、ベルリンへ帰り、コッホと共同研究に携わり、また病理解剖学研究所で研究を行った。一九〇二年、ペスト研究にロシアのオデッサに出張、翌年、ベルリンのシャリテ病理学教室研究員となった。一九〇六年、コッホのアフリカ旅行に同行。リディアは、プロイセンで最初に教授資格を得た（一九一二年）女性である。

一九二〇年、教授はモアビット病院の細菌・血清学研究室主任に就任。一四年間同研究室を主宰したが、一九三四年、ナチスによって同院から追放。翌一九三五年ベルリンで死去した。

教授は、五〇以上の論文を執筆。内容は多岐にわたるが、とくに結核を研究した。

夫君ワルター・ケンプナー博士は、ベルリン衛生功労医。令息ロベルト・ケンプナー博士は、法律家でプロイ

センの官僚であったが、ナチスに追われて亡命し、後にニュールンベルク裁判でナチスによるユダヤ人迫害について証言した。令息ワルター・ケンプナー博士は医師で、ケンプナー式米食療法を創案した。ケンプナーは、ポーゼンの小都市ケンペン出身のユダヤ人の多くが名乗った姓である。この姓を持つ劇作家、法律家、文学者などがいた。

ローベルト・コッホは、一時モアビット病院を研究所の関連施設として使用していた。坪井次郎は、モアビット病院でコッホが提唱した結核のツベルクリン療法の講習を受けたが、モアビット病院とコッホとの密接な関係によるものであろう。ケンプナー教授がモアビット病院に勤務したのは、そうした関係からと思われる。モアビット病院は、ナチスの支配期、ローベルト・コッホ病院と改名させられたが、これもその関係によろう。

ケンプナー教授のことを調べていて気がついたが、初期の細菌学・免疫学研究にユダヤ系医学者が大きな功績を上げた。エールリッヒ、ウイダール、ワッセルマン、ラントシュタイナーらの名前を挙げただけでも明らかであろう。またカガンの『ユダヤ医学』が挙げる第二次大戦前の著名なユダヤ人細菌・免疫学者二七名のうち、七名がコッホ研究所の出身であることも注目すべきである。

（介護老人保健施設　陽翠の里）